



～ご挨拶～

皆様、新年おめでとうございます。今年もがん研TCC通信をお届けいたします。がん研有明病院は2005年の2月に大塚から有明に移転してきましたので、この2月でちょうど20年になります。初めの十数年で、手術を中心に治療件数が大きく増加し、職員数も2倍になりました。当初はゆとりのあった病院建物も満杯となり、途中の増設工事を経て、もうこれ以上膨らませようがなくなっています。今後この空間を最大限効率的に使うべく、今年は内部の配置換えの工事を始めます。日常臨床になるべく影響が出ないように行う予定ですが、どうぞご理解ください。

本号のTCC通信では、当院自慢の肝胆膵外科・内科をご紹介します。近年この領域のがんが増加傾向にあります。同時に治療薬の開発も目ざましく、以前は諦めざるを得なかった病態でも、集学的治療により根治を目指せるものが増えてきました。こういう難しいがんこそ私たちの腕のみせどころだと考えています。とはいえ、まだまだ難治がんの代表格であることにはわかりなく、期待を抱いて受診される多くのセカンドオピニオン患者さんを落胆させてしまっているのは残念です。さらなる治療成績改善に向けて努力します。

病院長 佐野 武



今年度も「がん研キッズ探検隊」を開催しました

活動報告 サバイバーシップ支援室

サバイバーシップ支援室 チャイルド・AYAサポートチーム
乳腺外科副医長 植弘 奈津恵

2022年より年1回開催してきたがん患者さんのお子さんを対象とした「がん研キッズ探検隊」ですが、今年度は5月26日と12月1日の2回開催しました。5月は初の現地開催で、9家族10名の子供達に院内を探検してもらいました。グループに分かれて外来処置室、外来化学療法室、薬剤部を回り、縫合や点滴治療などの疑似体験をしました。12月は6家族9名の子供達が参加し、オンラインでビデオを用いた院内探検を行いました。このツアーはお子さんにごん教育と心理教育を行い、家族間のコミュニケーションを促進してもらうことを目的としています。毎回、参加者からは好評を頂いており、スタッフもこの活動の意義深さを実感しております。12月は愛知医科大学病院と共同開催し、この活動を広めていく重要性も感じました。今後も定期的な開催を続け、学会等でも報告していく予定です。



診療科紹介

肝胆膵外科



肝胆膵外科は肝臓・胆道(胆管や胆嚢)・膵臓腫瘍に加え、十二指腸や後腹膜原発の腫瘍に対する外科治療を担当しております(年間600件以上の手術、悪性腫瘍切除450件以上)。肝胆膵領域はその解剖が複雑で、さらに症状が出にくいいため、進行した状態で見つかる疾患が多いのが特徴です。

わたしたちが日常診療で大切にしていることは、①肝胆膵チームで行うスピード感のある術前術後管理、②丁寧に過不足ない手術、そして③あきらめない外科です。

- ① 肝胆膵領域に発生する癌は解剖が複雑で進行した状態で見つかることが多く、診断に時間がかかります。CTやMRI、PET検査、内視鏡検査など数種の検査や処置が必要になります。内科・外科・画像診断部・IVR科の『チーム肝胆膵』で、正確な診断を行い、治療方針を迅速に決定いたします。また、大手術が多く術後の合併症もそれ相応に起こりますが、24時間体制で早期発見・早期対応します。
- ② 対応は迅速ですが、手術はあわてません。丁寧に出血量が少ない手術が患者さんの負担を軽減します。10時間クラスの長時間手術もありますが、慎重かつ丁寧な手術を心がけます。また最近ではロボット肝切除・膵切除を積極的に導入し、より緻密で低侵襲な手術を行えるようになってきました(これまで2024年12月現在340件施行)。
- ③ 当科は以前から癌を完全に切除する拡大手術を行ってきました。その方針はいまも変わりません。最近では切除ができない進行度の癌でも、化学療法との組み合わせにより切除対象になるコンバージョン手術症例が増えてきました。内科と強い連携をもって対応しております。

患者さんそれぞれの病状に応じた最適な治療を提供いたします。
今後ともがん研・肝胆膵外科をよろしく願いいたします。

院長補佐 兼
肝胆膵外科部長
高橋 祐



肝胆膵内科



- 肝細胞癌**: HCVの克服により全体として減少傾向ですが、非B非C型肝炎は増加しています。進行期肝癌の治療として、免疫治療を含む薬物療法にTACEを加える、肝癌ならではの展開も興味深いところです。
- 胆道癌**: 特に肝門部領域胆管癌に、外科と共に挑み続けています。内科の役割は、胆道鏡による正確な進展度診断と、胆管炎を最小限に抑える効率的なステント治療(inside stent)です。切除不能例では薬物療法と並行して積極的にCGP検査を行い、有望な選択肢を逃さぬよう注意しています。
- 膵癌**: FFXやGnP療法の登場から10年が経ち、長期予後も分かってきました。切除不能癌のうち局所進行例で2年、転移例で1.5年が目安ですが、著効例ではConversion手術により5年生存を達成する症例も増えてきました。
- 神経内分泌腫瘍**: 設備が整い、2023年よりPRRT(ペプチド受容体放射性核種療法)を実施しています。
- 胆膵内視鏡**: 2024年はERCP,EUSそれぞれ1,000件を実施しました。ERCP困難・不応例に対するEUS下胆道ドレナージはQOL改善に貢献しています。

肝胆膵がんは急を要する病態のことが多く、常に最短での診療を心がけ、“良きを望み悪しきに備う”精神で患者さんとともに闘っています。ご支援・ご紹介のほど宜しくお願い申し上げます。

院長補佐 兼
肝胆膵内科部長
笹平 直樹

